

【フロンティアスクール用中間報告書様式】

(都道府県 福岡県)

・学校の概要(平成15年4月現在)

| | | | | | | | | | |
|------------|----|----|----|----|----|----|------|-----|-----|
| 芦屋町立 芦屋小学校 | | | | | | | | | |
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 0 | 12 | 18 |
| 児童数 | 55 | 56 | 49 | 56 | 68 | 58 | 0 | 342 | |

・実践研究の概要

1. 主題(テーマ)

「生きる力」を育む基礎的・基本的な学力の確実な定着を図る教育活動の研究
～学力向上フロンティア事業の推進を通して～

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

- 1～6年生 算数(子どもが達成感を味わいやすく、少人数学習に関して本校での取り組みの実績があったため)
- 3～6年生 理科(子どもの実態として科学的なものの見方、考え方が十分に身につけていなかったため)

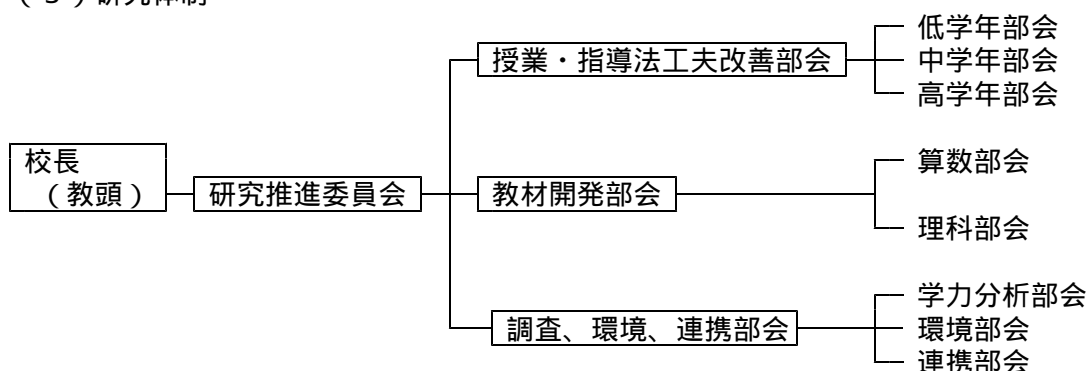
(2) 年次計画

| | |
|--------|---|
| 平成14年度 | <p>テーマ 「生きる力」を育む基礎的・基本的な学力の確実な定着を図る教育活動の研究 ～学力向上フロンティア事業の推進を通して～</p> <p>仮説 個に応じた指導のために、補充的・発展的な教材開発や習熟度別などによる指導方法・指導体制の工夫改善を行い、単元構成において適切な評価活動を位置付ければ一人一人に基礎・基本の確かな学力の定着が図られ、「生きる力」を育むことができるであろう。</p> <p>研究内容・方法 研究内容：算数「量と測定」、理科「地球と宇宙」 研究方法：補充的・発展的な教材の開発、習熟度別など指導方法・指導体制の工夫改善、「わかる授業」のための綿密な単元構成と適切な評価活動、日常的・継続的な指導の工夫改善</p> |
|--------|---|

| | |
|--------|--|
| 平成15年度 | <p>テーマ 「生きる力」を育む基礎的・基本的な学力の確実な定着を図る教育活動の研究 ～学力向上フロンティア事業の推進を通して～</p> <p>仮説 個に応じた指導のために、補充的・発展的な教材開発や習熟度別などによる指導方法・指導体制の工夫改善を行い、単元構成において適切な評価活動を位置付ければ一人一人に基礎・基本の確かな学力の定着が図られ、「生きる力」を育むことができるであろう。</p> <p>研究内容・方法 研究内容：算数「数と計算」、理科「物質とエネルギー」 研究方法：補充的・発展的な教材の開発、習熟度別など指導方法・指導体制の工夫改善、「わかる授業」のための綿密な単元構成と適切な評価活動、日常的・継続的な指導の工夫改善</p> |
|--------|--|

| | |
|--------------------|--|
| 平成 16 年 度 | テーマ |
| | 「生きる力」を育む基礎的・基本的な学力の確実な定着を図る教育活動の研究 ～学力向上フロンティア事業の推進を通して～ |
| | 仮説 |
| | 個に応じた指導のために、補充的・発展的な教材開発や習熟度別などによる指導方法・指導体制の工夫改善を行い、単元構成において適切な評価活動を位置付ければ一人一人に基礎・基本の確かな学力の定着が図られ、「生きる力」を育むことができるであろう。 |
| | 研究内容・方法 |
| | 研究内容：算数「図形、数量関係」、理科「生物とその環境」 |
| | 研究方法：補充的・発展的な教材の開発、習熟度別など指導方法・指導体制の工夫改善、「わかる授業」のための綿密な単元構成と適切な評価活動、日常的・継続的な指導の工夫改善 |

(3) 研究体制



・平成15年度の成果及び課題

成果

(1) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制について

すべてが手探りであった昨年に比べ、本年は少人数学習の有効性という点に関して多くの成果を上げることができた。少人数担当教師が低・高学年に一人ずつ入ることで、学年の系統も考えながら学年に応じて単元構成の工夫をしていけるようになったからである。学年や単元に応じて少人数学習の形態を変え、単元構成を工夫することで個に応じたきめ細かな指導をすることができた。例えば、低学年においても単元の終末時に習熟度別学習を取り入れ、補充的な学習コースと発展的な学習コースに分け、補充的な学習コースではさらにT・Tも導入するなどして、学力定着が不十分な児童への支援ができた。全学年を通して一貫した指導体制が整ったことで、全職員の共通理解も深めることができ、どの学年においても少人数学習をいつでも取り入れられるようになった。このことを通して、児童の学力を高めることができた。特に、算数における計算力に関してはいわゆるC段階の児童の学力の底上げをすることができた。学力はもとより、児童の学習意欲も高めることができたことはまちがえない。児童へのアンケートによれば学習への意欲が高まったことが分かるし、「研究を振り返って」という教師へのアンケート調査でも、すべての教師が児童の意欲と学力の高まりを挙げている。さらに成果を十分に感じ取った職員の協働体制もできてきたし、学級を越え、学年を一単位として考えていく意識が強くなってきたこともまちがえない。

(2) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発について

本年度は、発展的・補充的な学習の視点を明確にしたことで授業の中でもそれを意識して取り入れてきた。学習プリントの作成においても問題数をかえたり、自分で選択できるようにしたり、考え方を問うてみたりして、個に応じた指導が適切に

できた。補充的な学習については、朝のドリルタイムや授業の導入、終末などにもきちんと位置づけることで時間を確保することができたし、繰り返しや積み重ねをすることで少しずつ定着もしつつある。このような補充的な学習は、基礎的・基本的な学力をつける上で有効であった。発展的な学習においても、様々な方法を取り入れることで個に応じようとした。難易度を上げたり、問題数を増やしたり、興味・関心を広げるようにしたり、生活に生かしていけるようにしたりなど、多種多様な発展的な教材の開発ができた。さらに例えば、算数において難易度を上げるだけの発展的な学習でなく、既習内容を使って考え方を説明させるような発展的な学習は、その単元の基礎・基本をきちんと押さえていないとできず、理解を深めることに役立ち、基礎的・基本的なことの再確認となった。これは今後、発展的・補充的な学習や教材を考えていく上で大きな成果であったといえる。

(3) 子どもの学力の評価を生かした指導について

昨年同様、診断的評価、形成的評価、総括的評価には力を入れてきた。合わせて、学習実態調査や学力テストの結果を細かに分析した。このことは児童の実態の把握と個に応じた指導に大いに役立った。評価規準も見直し、A(見取りの視点)、B(おおむね満足できると判断されるもの)、C(支援)という項目にしたため、児童の実態に合わせた観点別評価が適切にできた。さらにその評価に照らし合わせて個に応じた指導にも役立てることができた。1時間の授業においては、めあてを明確にしたことで、児童はその時間に何を学習するかが分かり見通しを持って学習することができたし、授業終末時にはめあてを達成できたかどうかを自己評価することができた。そのための練習プリントやふりかえりプリントは児童による自己評価と教師による形成的評価をする上で有効であったといえる。

来年度へ向けての課題

- ・同学年教師や少人数担当教師との教材研究や毎日の授業の打ち合わせの時間の確保
- ・習熟度別学習におけるより適切なコース選択、グループ編成
- ・さらなる定着を図るための教材・教具の工夫改善、開発
- ・課題別学習の理論的研究と単元構成上の効果的な運用について
- ・教材・教具の共有化(無駄なく、無理なく、むらなく、いつでも誰でも使えるように)
- ・発展的な学習の深化と拡大

・学力把握のための学校の取り組み

年2回の学力テストの実施(第1回 5月に実施 第2回 2月下旬実施予定)

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

- ・地域への授業公開 5月13日:6年生算数 10月9日:3年生理科
オープンスクール 1学期 6月24~26日
2学期 11月26~28日
- ・実践交流会 10月24日:全学級による算数・理科の授業公開と全体会、分科会
- ・その他
 - ・NHKによる取材 5月~9月(5年生算数を中心として)
(平成15年10月25日 NHKスペシャルにて放映)
 - ・県内外の市町村教育委員会や行政の方、県内外の学校関係者の方など年間約10件の学校訪問

【新規校・継続校】 14年度からの継続校

【学校規模】 7~12学級

【指導体制】 少人数指導、T・Tによる指導、一部教科担任制

【研究教科】 算数、理科

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有